

## 日本の近代史から学ぶ 変革期を生き延びる道



かとう ようこ  
**加藤 陽子**  
【歴史家・東京大学教授】

高校の日本史の教科書や、NHKの「坂の上の雲」「龍馬伝」が人気になるなど、歴史、特に日本の近代史への興味が高まっていますね。時代の大きな変わり目にいることを感じ、明治維新を支えた人々から学ぼうとする気持ちが源流にあるのでしょうか。「歴史に学ぶ」というのは、とても素晴らしい姿勢です。そこで、ちょっとだけ、お役に立ちそうな「豆知識」を。

米国の歴史家、アーネスト・メイの『歴史の教訓』にこんな言葉があります。「政策形成者 (policy makers) は、通常、歴史を誤用する」。我々は、自らの都合のいい歴史にのみ、今直面している課題との共通点を見いだしがちだ、ということでしょう。ちなみに彼は、米国がベトナム戦争の泥沼から抜けられなくなった理由として、「歴史」の影響を指摘しています。第2次世界大戦であれだけ中国に肩入れしながら、共産化によって全く果実を得られなかった。だからあくまで北ベトナムを倒そうとした、と。

歴史を学ぶには、広い範囲を、公平な解釈に基づいて知っておくことが望ましい。でも実社会で忙しい方には、なかなかそこまでの時間はないですね。ならば、こんな一言だけ覚えておくというのはいかがでしょう。変革期について歴史から学ぶなら、いつ、誰が、何を「捨てたか」を考えるのです。

大雑把に申し上げましょう。歴史上の体制の変革とは大抵、「どうやら、この制度の下では貸したお金は戻ってこないぞ」と思った人が現れた時から始まります。「どうせ返ってこないなら、崩してしまうか」と考えた人が、時代を動かすに足る数に至ったタイミングで、誰でも何がしかは持っている自分の既得権を捨て、「崩される側」から「崩す側」に飛び移った人だけが、次の時代に生き延びた。

明治維新もこの枠組みで説明してみましょう。江戸時代は天保年間の頃から、武士階級という「公」に対して、豪商、富農といった「民」がお金を貸し付けることで、経済が動いてきました。その間、頻りに借金棒引きが繰り返され、さらに黒船が登場したことで「もうこの体制には返済能力がない」と、多くの人々が江戸幕府を見切ります。その結果、明治維新につながる。大変革をリードしたのは、旧来の制度を超えた抜擢などで、武士階級の既得権をいち早く手放したグループだったことは、ご存じの通りです。

彼らが作った明治政府は、幕府から引き継いだ負債（豪商からの借り入れに加え、藩士たちの俸給など）の相当部分を踏み倒し、その犠牲のうえで、地租（税収）に基づく収入に見合った財政支出で再出発します。

歴史はそのままの形では決して繰り返しません。でも、変革の原動力として共通するものはある。それを探し出すのが、歴史を学ぶ本当の面白さなのですね。ここでちょっと、今の私たちを振り返ってみるのも面白いでしょう。「政府に貸したお金は返ってくる」と信じているか、否か。あなたの判断はいかがですか。答えによっては「捨てる」覚悟を、固めた方がいいのかもしれない。（談）